《野川を生命あふれる川に！》

遊ぶ会河原版

創刊号

1991.6 発行

代表・編集
野川で遊ぶ
まちづくりの会
依田 Tel 0424(80)8861
尾辻 03(5384)5539
内藤 0424(89)9351

【共に生きる】

代表 尾辻 義和

丸の内のカルガモ親子が、毎年話題になります。カルガモ親子の行動はその可愛らしさと、都会の人口池という背景とのミスマッチも手伝って写真やテレビの被写体となり、カルガモフィーバーとなりました。カルガモ親子は東京近郊でも毎年見られますが、丸の内の彼らが大人気なのはなぜでしょうか。

一つは、身近にカルガモ親子の住める場所がなく、カルガモの親子が珍しいということがあります。カルガモにとっては、水があり、えさがあり、巣が作れて、安全なところが必要です。皮肉にも丸の内のビル街にある池とその付近はその要素を備えているといえます。そういう所が私たちの身近になくなっていることがこのフィーバーをもたらしています。

もう一つは、コンクリートで囲まれた人工的な環境にたくましく生きる姿に感動を覚えるからではないでしょうか。「よく、あんなところで・・・・」ということだと思います。

さらには、あたりまえのことですが、カルガモが生き物であることです。都会のまん中で人間以外の生き物に接すること自体あまりないことですが、生き物が存在していることに安心感が感じられるのではないでしょうか。

おおげさにいえば、同じ地球上に共に生きる仲間であることを感覚的に受け入れているといってもいいのではないでしょうか。

最近、うるおいや、やすらぎの感じられるまちづくりがよく聞かれるようになり、さまざまなこころみが各地でなされています。玉川上水、野火止用水の復活や、公園にせせらぎをつくるなど水や水辺を利用したものが多くなりました。調布市でも東京都が「いこいの水辺」ということで、野川の河川敷と川床に人工的に岩などを配置し、積極的に誘導する工事を行いました。野川にはまだまだ多くの自然が残っていて、さまざまな生き物が生息していますが、今回の工事はそれらの生き物にとって必ずしもいいとはいえません。

私たちや私たちの子供にとってほんとうに豊な環境とは人工的な「いこいの水辺」なのでしょうか。

調布市の野川はこれまですべて金網の柵でかこわれており、川に入ってはいけないことになっていましたが、一部とはいえ、野川を身近にふれることができることは、たいへんうれしいことです。私たちは、この機会に子供たちといっしょに川で遊び、水に直にふれ、そこに生きる生き物と共に生きることを考えてみたいと思います。

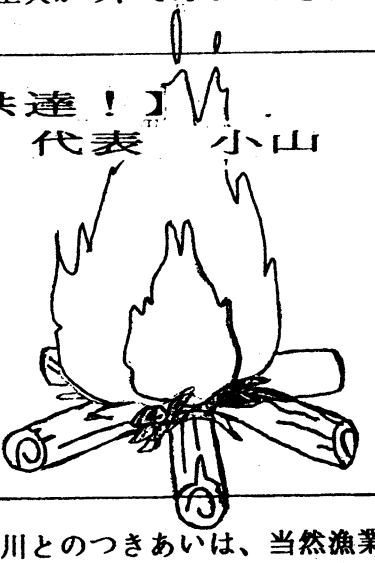
【確実な絆づくりを願う】

野川ホタル村　若竹キミイ（小金井市在住）

6/2、しばらくぶりで、野川沿いの道を下ってみました。調布の「中耕地橋」。きのうまで農業が生きていたのね、と思える橋の名前。いまは両岸とも殆ど宅地だけれど。岸に沿った緑は、いつごろからのものでしょうか。川を見おろすと、ア、話に聞いていた改修はこれ！いきなり日本庭園かナ、それともちがう。まだ出来たてで、ひと夏すぎてみなければ、景観としても言えることはすくないけど、雨もようというのに子どもの群がある。水質がいま程度なら、夏はさだめしにぎわうことでしょう。それより前に、夏草とのつきあいがどんな風かナ。ずうっと、きれいに草むしりなんかしてしまうかもしれない。側壁の段々には、芝桜が植わっていた。誰か、えだまめでも蒔いたらよいのに。ビール片手のおやじ達が群れるようになって、それからだと思う。こんな護岸はヘンだし、ここで満足している子どもで良いのか等など話ができるのは・・・。力の入ったイベントよりも、確実な絆を育てられる工夫から、そんなことを思っています。

【豊かな遊びの中で育て子供達！】

狛江・野川に親しむ会　代表　小山　信子



「野川に親しむ会」の前代表の尾辻さんは、調布に引越してしまってから、しばらくなりを潜めていましたが、調布でも仲間をみつけてちゃんとグループができました。「遊ぶ会」の人々は狛江に地下水の探偵に来てくれたり、調布でもあれこれ活躍を始めましたが、旗やら看板やらグッズも決めちゃって、我々はただ口を開けて感心するのみです。

でもね、調布は良いよ。崖線、湧き水、雑木林のキャンプ・・・狛江はただ、ただ平坦なんだもん・・・。と私は少しふてくされています。

野川とのつきあいは、当然漁業ではなく、もはや農業でもなく、遊ぶというのが一番手っ取り早いつきあい方だ。遊ぶといえば、子供達を抜きには淋しい。柏野用水の清掃、カニ山キャンプと子供達は何となくヒラヒラ、フラフラしていましたが、用水のエビに熱念を燃やした奴、ナタでマキ割るのをマスターした奴、ひたすらドクダミの天プラ係に徹した奴、シュラフたたみは面倒くさいし、肝だめしで懐中電灯はとりあげられるし・・・貴重な体験をしたと思う。

川の中から水の中を、街を見つめて・・・たくさんの遊びの積み重ねの果てに賢い子供達が賢い大人達に育って行ってくれると思う。きっと。その為にも豊かに遊ぶことのできる場所、時間、人のつながりを私達はしっかり確保しておきたいと思います。

—Moomin—

【安全でおいしい地下水を飲み続けるために】

調布の地下水を守る会　事務局長　大木　和彦

多摩地域では、水道資源の約４割を地下水に依存してきました。調布市で約６７％、昭島市では１００％を地下水で賄っています。

しかし、東京都では地盤沈下対策と地下水の発ガン性物質汚染により、地下水の汲み上げを停止し、１９９０年までに全面的に河川水に切替える「地下水転換計画」がありました。

こうした動きに対し、’８７年７月１１日クラブ生協、調布生協、都民生協と調布市職員労働組合が中心となり、「調布の地下水を守る会」が４０名の市民を集め結集されました。同年、１２月調布議会に「安全でおいしい地下水を守るための陳情」を１カ月で約７０００名の署名を集め市議会に提出し、’８８年９月市議会でようやく主旨採択となりました。

また、多摩地域の水問題、環境問題に取り組んでいる各生協、市民グループ、労働組合が呼びかけ、地下水シンポジウムを開催しました。第１回を’８９年１１月、国分寺市で２２０名を集め「地下水転換問題」と題し、第２回を’９０年１２月、府中市で１７０名の参加を得、「地下水保全条例の制定に向けて」東京都と市民が地下水について討論しました。

会では、地下水の問題を通して、地域の水、自然環境にも目を向けようと、野川の湧き水巡りをこれまで４回行い、毎回４０～７０名の参加があり、水に対する関心の深さがうかがえました。また、「野川、深大寺の水質・水量調査」を毎月第１土曜日、午後１時３０分から又住橋（武蔵野市場東側）で行っています。（手伝っていただける方は現地にお願いします。）

しかし、野川について２つの問題が出て来ました。１つは、昨年度から東京都が行っている親水化工事「いこいの水辺づくり」で、河川構造、景観、地元対策等について考えていく必要があります。２つ目は、関東村跡地に大規模下水処理場の建設計画があり、１日最大５２万m^3の処理水を野川に流す予定です。会が行った今年５月の流量測定では、１日約１万m^3で、これだけの処理水を流すことで野川がどうなるのか不安です。

今後、これまで野川に関わってきた市民グループのネットワーク化が必要になってくると思います。

深大自然広場で、暖かい日差しを浴びて昼食をすました後、いよいよ用水路での生き物採集が始まりました。

ところが清掃で悪戦苦闘したのとは裏腹に、魚類の研究者の方を中心に次々と採集の報告の声が上がりました。オタマジャクシ（３種）やアメリカザリガニはもちろんのこと、湧水にしかすめない貴重なホトケドジョウや海から上がってきたヨシノボリ（小型のハゼの仲間です）が見つかったのには驚かされました。

土、日ともなれば、たくさんの親子連れが、用水路に集まり生き物を採ります。短いコンクリート水路の中で、どうやって生きのびてきたのでしょう？そして、放水口が滝のように野川に落ちているのに、どうやって、小さな魚は上がってきたのでしょうか？小さな生命力に考えさせられること、驚かされることばかりでした。

きれいな水が流れているからといって、豊かな生き物が育つとは限りません。セキショウモ、クレソン、ウィローモス、アシといった草が水の中に森をつくっています。そして周囲に田んぼが生きているからこそ、人々から見捨てられずに豊かな水路になっているのです。

もっとも、水源の湧水が涸れたり、田んぼがなくなったり、水路をさらに改修したり、たくさんの人が生き物を採って飼い殺しにしたりすれば、あっという間にただの排水路になってしまうでしょう。小さな生き物たちを見守り、都市の中でもめずらしい谷戸田（やとだ）と呼ばれる景観を残して（生かして）いくには、私たちに何ができるか考えていかなければいけない時代に来ているようです。

たった一回の水路の清掃でも（もちろん、これからも続けたいと思っていますが）ささやかなアイデアと提案が出てきました。

◎キャンプ場整備のために埋め立てられた谷戸（通称ムクドリの谷、自然広場）にトンボ池をつくれないか。そして、素ぼりの水路に湧水を流したら‥

◎地下に潜っている部分を小川として整備できないだろうか。（「校庭の中に小川があったら、ボク絶対、学校を休まないよ。」という子どもの声が印象的でした。柏野小のことです。）

◎児童館（佐須）をめぐる水無し水路に用水を取り入れ、ミニ湿性植物園にする。

◎水路のフェンスを生け垣に替え、コンクリート水路を小川として再整備する。

◎水路の放水口を工夫すれば、野川が干上がっても小さな生き物は逃げ込める。

果たして、こういったことは、現実性のない提案なのでしょうか…？（内藤　茂）

※２週間後、この自然広場（カニ山）で野川キャンプを実施しました。１０家族３１人が集まり、住宅地とは思えない静けさと木々のざわめきの中で、朝まで環境論議がつきませんでした。その時の感想のいくつかを紹介します。

『田んぼの水路に春を探そう』　4月28日

○　調布市内の野川流域にも、「はけ」（国分寺崖線）下より何か所かの湧水が見られます。深大寺の湧水はその典型ですが、谷を一つ隔てた都立農業高校の農場にも良好な状態で湧水が残されています。

かつての湧水量と比べれば著しく減ったものの、その湧水が今も水田の用水として利用され野川につながっていることは、奇跡的とも言えるのではないかと思われます。現役の田んぼに現役の用水路、そして、湧水の源流から野川に至るまでが一本の血管のように細々と生きていたのです。

流程１kmの用水路のうち、半分近くが地下に潜ってしまっています。残りの半分が、コンクリート三面張りの巾２ｍ深さ30cmという状態です。生き物にとっては良い環境とはいえないのですが、外見よりははるかに豊かな生物相を持っているようです

それが証拠に、全面に高さ１ｍほどの金網フェンスがはりめぐらしてあるのにもかかわらず、２月の寒い時期にも子供たちによる生き物採集の姿が見られます。

清掃を兼ねての生き物調査

○　春先になれば、たくさんの親子連れがザリガニやドジョウを採りに用水路に集まってきますが、一体どんな生き物がいるのか調べてみようということになりました。

用水路を管理している組合に許可をいただき、生き物調査を兼ねた水路の清掃を市報・新聞で呼びかけたところ、家族連れを中心に27名の参加者となりました。

日常、道路から見える部分はたいしたゴミもなく順調にはかどりましたが、住宅地の裏手５０ｍ部分に入ると、一転して大変な騒ぎになりました。

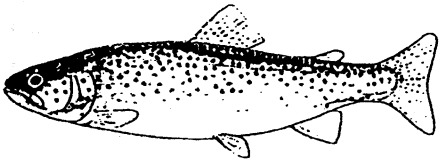
珍ゴミ・ベスト３は以下の通りです。③ビニール袋に入った猫の死体　②『止まれ』の道路標識　①消防車のものと思われるタイヤホイール…etc.　とにかくこの部分だけで、２トン車一杯分のゴミが出てきました。どんなに清流でも人から忘れ去られた時、ゴミ捨て場になってしまうでしょう。

水路はコンクリート張りですが、底には泥がたまり様々な植物が見られます。たった５００ｍの区間ですが、住宅地の上流はセキショウモやクレソンが繁茂し、下流にはアシ（ジュズダマ）が生い茂っている事は興味深いことです。また、水草によって２ｍ幅の水路の中でも流れが蛇行（だこう）したり、小さな淵ができていることに驚かされました。こういった水草による水の浄化作用はすばらしいものですから、刈り取りは最低限に抑えてほしいものです。

昼食時に、みんなで集まりパックテストによる水質検査が行なわれました。

水質検査というと専門的で難しいものと思われがちですが、薬品の入ったパックに水を吸い取り色の変化を見るだけですから、小学生の子でも簡単にできました。野川の水質に比べて、用水路の水がはるかに良いことは言うまでもありません。

水路で見つけた生き物たち　91'4'29



ニジマス

幻の鱒が出現するとのウワサは聞いていましたが、20cmの魚が採れたのには驚きました。

正体は、あの塩焼きにするニジマスです。北アメリカ原産ですから、日本の魚ではありません。きっと農場の養殖池からの逃亡者でしょう。

ドジョウ

いても当然なのですが、17cmの大物でした。どこにも隠れる場所はないはずなのに、彼女（メスだそうです）は悠然としていました。

日曜日ごとに多くの子供が彼女を狙っていたのに‥

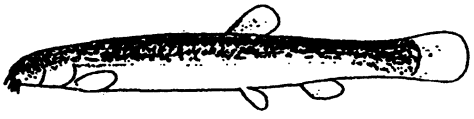
まさに水路の主でした。

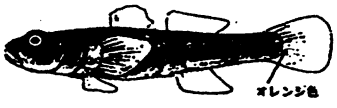
ホトケドジョウ

湧き水にしかすめない、貴重なドジョウです。東京ではほとんど見ることができなくなりました。

考えてみれば、わずか500mのコンクリート水路に生き残っていたのですから、奇跡的です。

夏になったら、また水路に逃がしてやろうね。

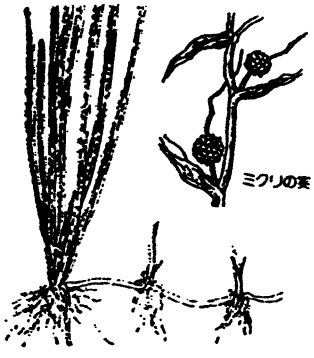




ヨシノボリ

わずか５cmのハゼの一種です。生れたばかりのときは海で育ちますから、30kmも上ってきたのですね。水路の放水口は垂直なコンクリートですから、それすらも乗り越えてきたのです。涙ぐましい話じゃありませんか。

飼ってみればおもしろい魚ですが、そっと応援しましょう。



ヒメミクリ（セキショウモ）

清流の象徴となる水草です。東京ではほとんど見かけなくなりました。水の中の森として、生き物にとって大切なものです。ザリガニ取りに邪魔だからといって、根こそぎ取ってしまうことなどないように‥！

ヤ　ゴ

（オニヤンマ）

トンボ好きの少年が鑑定してくれました。大人の親指より二回りも大きい、すごいやつです。

陸に上げられても尻持ち上げて威嚇していました。

最初に採集されたものですから人間も興奮しました。

オランダガラシ（クレソン）

アメリカザリガニ

あいかわらず、子供達の人気の的です。日本のザリガニがいる、と聞きましたが、何かの間違いかもしれません。食べてる者が植物質だと体の色は青くなってきます。

ヌカエビ

釣りの餌になるような小さなエビです。狭くて流れの早い水路ですが、水草の森がわずかに残っていたので生活できるようです。

『水生植物』

ウィローモス
リシア

『水生昆虫』

チラカゲロウ
ミズムシ

『その他』

ヒメタニシ
カワニナ
オタマジャクシ

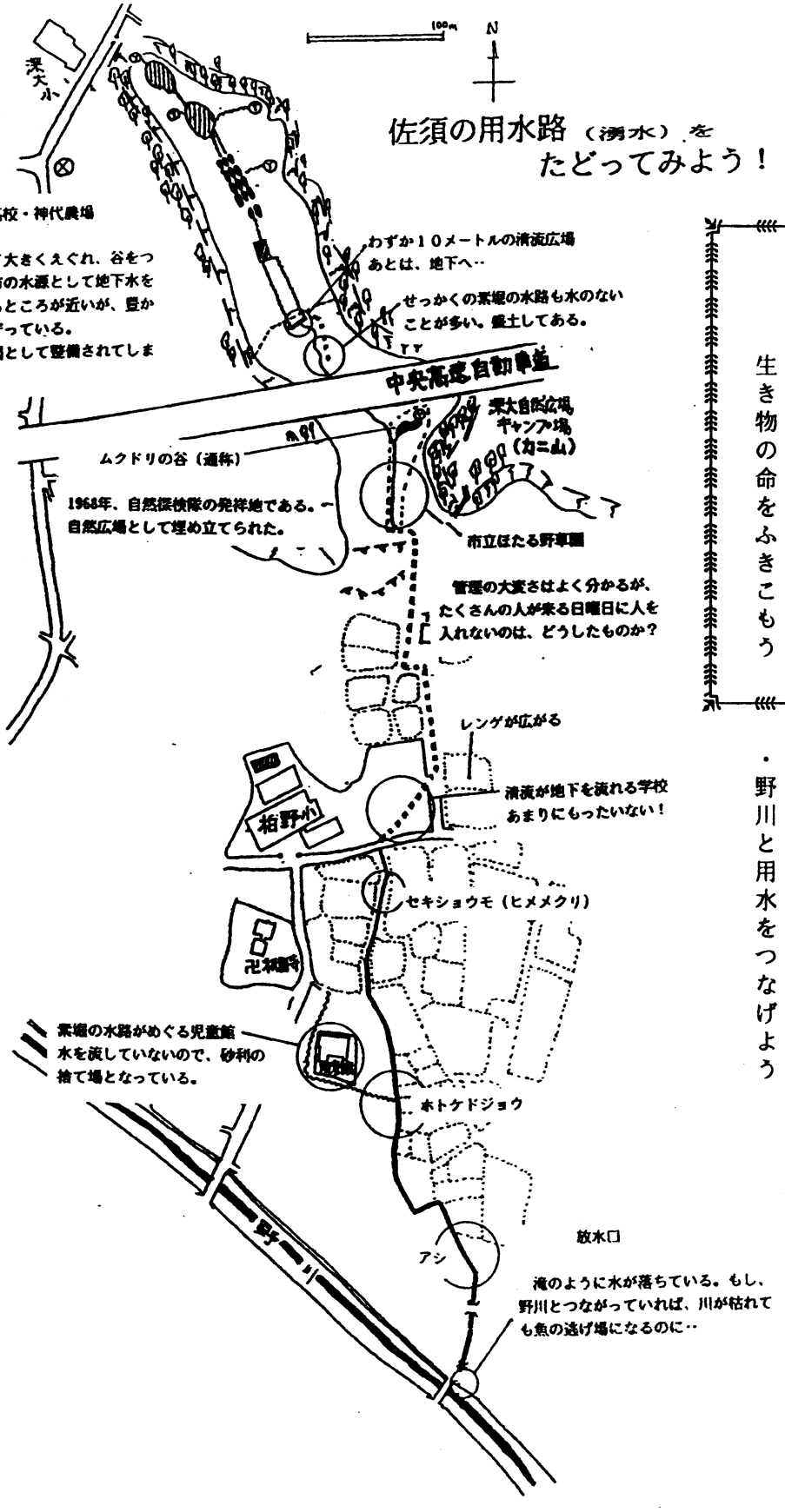
野川で遊ぶ
まちづくりの会

（連絡先）内藤　０４２４－８９－９３５１

佐須の用水路（湧水）をたどってみよう！

湧水は　野川の心臓です
水路は　野川の血管です
血液である清き流れに
生き物の命をふきこもう

・自然広場にトンボ池
・児童館に湿性植物園
・素朴な小川の用水路
・野川と用水をつなげよう



わたしの絵日記
―はじめてのキャンプ！

府中小・二年
古賀沙子

五月十一日、わたしのかぞく全いんと、いとこ三人、そして、おとうさんの知りあいの人たちといっしょにじんだい寺にキャンプに行きました。わたしは、キャンプなんてはじめてなので、テントでねるのがたのしみでした。

夜に、みんなと、はんごうでたいた ごはんでカレーを食べたら、ものすごくおいしくて おかわりをしました。

朝、すごく明るかったので、五時ぐらいからおきていました。

おかあさんとおとうさんは六時はんぐらいにおきてきて、

「もう、おきたの。」

と、おどろいていました。

それから川へ行って、ザリガニやカワニナやエビをとりました。

しばらくして、おとうさんが、小さいさかなをつかまえました。

「なんだろう。なんだろう。」

と、いっていました。

ずかんで しらべたら、おとうさんがとりたかった〝ほとけどじょう〟でした。

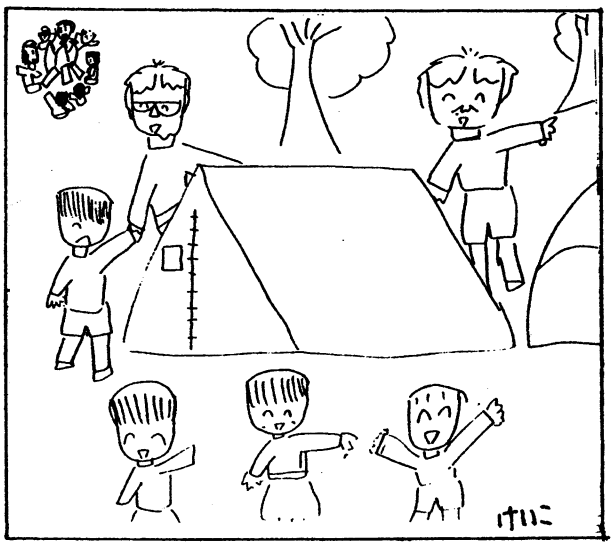
おとうさんは、

「やったぁ！やったぁ！」

といって、よろこんでいました。わたしは、

（キャンプ、おもしろかったな。また、行きたいな。）

とおもいました。



小さな友だち

柏江・七小五年
増田健太郎

僕にとって、柏野用水の探険やキャンプへ行った中で、一番楽しかったことは、用水でのえび採りです。

最初は、おたまじゃくしかザリガニでも、とれれば、と思っていたけれど、小さなえびがとれたのにはびっくりしました。

始めのうちは、だれも信用してくれなかったので、牛乳びんの中に入れた七ひきのえびを見せたら、みんな、

「こりゃ、本当のえびだわ…」

とびっくりしていました。中学生のお兄さんと魚の先生が、「ヌカエビに違いない。」と言ったので、その小さなえびの名を知りました。

学校でもその話をしたら、友だちのヒューちゃんと、そのお父さんがキャンプに来てくれることになりました。ぼくは（また、えびがとれるといいなぁ。）と、ずっと思っていました。

ところが当日、遊んだり、まき割り、テントはりの手伝をしていたら、えびのことをすっかり忘れてしまいました。…（中略）…

よく日、みんなはUFOで遊んでいたので、一人で用水に行きました。すると、キャンプに参加していたおじさんの家族が魚をとっていました。

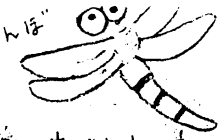
またしても……えびは、とれました。

帰りに、いっしょに魚をとっていたおじさんたちにえびをあげたら、とっても喜ばれました。

また、キャンプをやったら、えびやどじょうをとりたいなぁ。

《トンボと環境》

狛江市　中学3年　上村 佳孝



調布と狛江市、ぼくたちの住んでいるこの町にどのくらいのトンボが住んでいるかご存知ですか？　およそ30種類です。

ぼくはおととしの夏からトンボに興味を持ち、狛江市の西河原公園や多摩川を中心に一番興味を持っているのが「トンボと環境の関わり合い」です。すべての生物の生活は環境と深く関わり合っていて、その環境が変化すれば、大きな影響を受け、場合によってはその場所から消えてしまうこともあります。
トンボも例外ではなく、幼虫（ヤゴ）の住む水中、成虫が飛び、餌を取り休む草原や森林の両方がそろい、それぞれ安全で安定していなければ住むことのできない弱い昆虫です。

また、トンボは肉食で、食物連鎖の中でも上の方の位置を占めています。このような動物ほど環境の変化による影響も大きく受けるのです。

トンボの住めない環境が人間にとって安全な環境であるはずがありません。調布・狛江市内でたくさんのトンボが見られる場所は河川敷や公園（とくに水場のあるもの）が多いようです。やはり環境が一番大きな問題です。

注意しないとなかなか気が付きませんが、住宅地の中のちょっとした緑にも意外に多く住んでいるトンボ、今年の夏には、ぜひ彼らの生活ぶりを注意して見て下さい。そしてトンボが安心して住める安定した環境が増えるように身の周りの小さなことから努力したいと思います。

上福岡・お父さん（吉田 進）

久し振りに子どもたちの〝気〟の出た声を聞きました。やはり子どもは、おとなもそうでしょうが、心からたのしいことをしようとすると元気が出てくるものなのですね。

行きがけに甲州街道を自転車で走っていたら、思いがけず、野川沿いのサイクリングロード（？）が目に入り、しばらく、川ぞいに走りました。水がきれいなのと鳥も多く、生きものがいる気配がありました。もちろん小生が住む上福岡の川との相対的な比較ですが。

小生、調布で生まれ育ったものですから、川との共生に深い思い入れがあり、都会のほとんどの川には絶望しかありませんが、この野川には、皆さんが関わっていることもあって、より生きた川のような気がします。ぜひより積極的に〝いいなぁ〟と思える川にして下さい。

上福岡・むすめ（吉田 誠子 中1）

―CAMPに参加して―

キャンプに参加しておどろいた事、それは「本当にここが東京なの？」ということでした。聞いてはいたけれど、ここまでは想像つかないくらいでした。聞いただけでもおどろいていたんですョ。
キャンプする森の中に入ってしまえば、東京なんて思えません。上福岡にだってこんな所はありませんから。
久しぶりの友達に自転車を借りて、野川の少し上の方まで散歩に行きました。すきとおっている水にはこいがいて、その上にはかもがいて、すばらしいなと思いました。
その他にもいろいろな動物がいて感心するばかりでした。わき水が出ているということはすごいことだと思い、それを今もキレイに残して来た人々もすごいと思いました。これからも野川の貴重な自然を残していってもらいなと思いました。
夜のごはんはカレーライスでした。飯ごうでたいたご飯。味は、飯ごうでしか出せない香ばしさがありとてもおいしかったです。ご飯を食べた時もやはり東京という感じがしませんでした。けれど自然と親しみながらご飯を食べるなんて幸せなことでした。
次の日の帰り道、野川の横の細道を歩いていると、野川の土手にカンのゴミがたくさんあり、どういう思いで野川にゴミを捨てたのかな。と思いました。
山、川、野原をよごす人は自分の心をよごしているのと同じだと思いました。これから私は自分で自然をよごすような、心をよごすようなことはしないように気を付けようと思いました。

【生き物・こども・喚声　舞台は野川】

小金井市　在住　本木　伸太郎

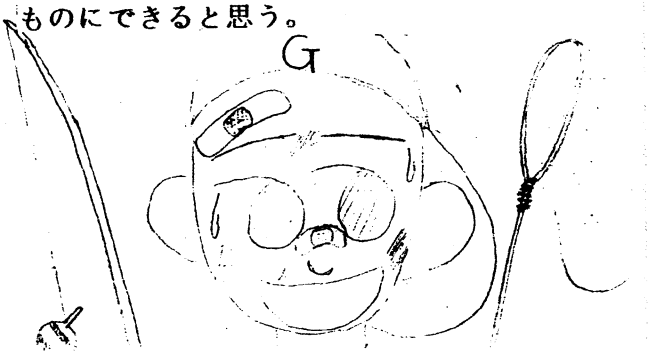
◆『カレーのブーさん』のご主人、野川調節池の湧水復活に取り組む◆

夏休みの野川、数人の子供達が川の中で喚声をあげて魚を追っている。小5位の男の子が7～8才の子に「そっちは深いから行くな」などと大声をあげている。40年程前濃緑にかわった水田の間の用水路野川べりで普通見られた光景である。親や教師なしで子供達は年上の子から遊びを通じてさまざまな事を学習し自分達が大きくなれば弟や近所の小さな子の面倒をみるのは当たり前のことであった。

さて最近脳の働きや発達を解説する番組で縦縞の模様の箱の中で子猫を育てると横縞を認識できない猫になってしまい、人間も成人して手術などで初めて開眼した場合は形や色の識別ができないこと知った。又脳はさまざまな〝学習〟の度に神経組織が広がり完成に近づくという。この課程は幼児幼年期に驚くほどの早さで進行し親や周囲の人達は適切な刺激を適切な時期に与える必要が有るという事である。たしかに花や蝶に関心を示さない人はいっぱいいるし、情操に影響を与えるであろうことは想像に難しくない。

私は近頃親子の遊ぶ光景を見たり、若い人話をしていて慄然とする事がある。カマキリを掴めない若い父親カエルを見て悲鳴を上げる母親、昔の野川の話をすると明治時代か異次元の世界の話を聞くような反応をする人達がいるという事だ。「見た事もない風景を想像するのは無理な話です。」とかれらいう。自然という言葉の中身に私とは違うものがある事を知らされた訳である。今子育てをしている年代の人は考えてみればコンクリート壁に閉じ込められたドブ川状の野川しか知らないのだ。他所から流入した人達も似たようなものなのであろう。

人間の歴史は400万年とか。虫や魚、鳥、植物、水、土などは身近にあった。というよりは人は自然から学び他の生き物と共存してきたはずである。しかし自然との絆はここ40年程で切れかかっている。これは生活様式などにも影響をおよぼし子供達だけで川遊びをする事も希になってしまった。以前充分でなかった本は溢れ、マスメディアが発達し、情報や知識を得る機会は格段と増えた。しかしこの事は実体験が減り代償体験の増加に拍車を掛けたのではなかろうか。図鑑の中のトンボは飛ばないし、美しい自然を映し出すテレビの画像から春芝の軟らかい葉が茂り始めた繁みの中を走りまわった時のさまざまの木の香や心の高揚は伝わってこない。手の中で動く魚の生命感は川遊びをして初めて判る。こうしてみると野川や涌き水や周辺の植物、生き物は身近にある貴重なる子育ての為の環境のひとつと思われないだろうか。小さな生き物がいっぱいの中で遊ぶ子供達の喚声がそこここで聞かれるようになった時、野川は生命力を取り戻し、又私達は継続的な努力を続ける事により、野川よ周辺の自然を自分達のものにできると思う。



【頑張れ、都市農業！】　依田　輝男

四国の山の中で子供時代を送り、たんぼやあぜ道を遊び場とし、近くの小川で泳ぐことを覚えた私であるが、東京へ出てきて３０年がたち農業のことなど忘れたかの如く、デラシネの都市住民として、百姓とは何となく関係のないような顔をして長い間過ごしてきたような気がする。しかし最近の農業あるいは農政に対する袋だたきともいうべき状態を見ていると何か変だな、どこかおかしいのじゃないだろうかと思わないわけにはいかないのだ。

２０００年にわたる農耕民族の末裔としての血が騒ぐというのか、皮膚感覚として、昨日まで大根やナスの花が咲き、ちょうちょが飛んでいたところが根こそぎ整地され、ブルトーザーが入り、ワンルームマンションらしきものの形が鮮やかになるにつれ自分の心の中がザラザラと荒らされて行くような気になるのだ。

考えてみればこの３０年間の日本は（さらにさかのぼれば明治以来の西洋に追いつけ追い越せの富国強兵１本やり政策まで行きつくのだろうが）ずっとこのようだった気がする。

経済効率万能の印籠の下では農業も文化も虫や草花や原っぱもボランティア精神もひたすら無駄なものとしてひれ伏さざるをえないのだ。そして百姓の子孫である私達は半ば関係のないような顔をして、虫や草も生きられないような密集したコンクリートの中で自虐的ぶ「ザマアミロ」とつぶやくのだろうか。

私達都市住民はあまりに劣悪な住宅事情に対する怒りを理不尽にも精神と肉体をそそいで励んでいられる農家の人々に向けるという狭量な気持ちにまで追いつめられているのだろうか。もともと人間は生産の場所に存在してこそ精神の安定性を維持できるのだ。自然や生産の場からバラバラに切り離されれば、人間は奇妙に存在感を失い、現実と非現実の境界を見失ったいわゆる「おたく族」のような、あるいは逆に「もの」にしか価値を見いだせない人間となるしかないだろう。

ここで私は突然結論を急いでいってしまいたいのだが、すべての自然保護、あるいは環境保護をいう人は、「農業を守れ、農地を守れ」といってもらいたいのだ。現在の環境問題の源はつまるところ工業優先社会のエネルギー消費量が地球の許容量を超えてしまったことにあると思う。僕達の子供の頃無限に広く思え、コロンブスのアメリカ大陸発見や、リビングストンのアフリカ探検物語に胸を躍らせたあの地球ははるかに遠い昔の話になってしまった。

東南アジア・アフリカでますます進行する砂漠化。２１世紀には１００億人を超えるといわれる人口問題もかかえいる。

この限界性を露わにした地球で流行のやさしく生きるとは本質的に自然の一部である人間が、地球の本来の姿である自然生態系の循環的サイクルに従って生きることであり、農的生き方こそ世界に通用するトレンディな生き方だと思う。六本木を中心とする「井の中の蛙」的、「排他」的トレンディドラマに較べてはるかに農業に生きる人達こそドラマの主人公にふさわしいとエールを送りたい。

「いこいの水辺広場」
工事についての「説明会」メモ

1月	工事始まる。「野川で遊ぶまちづくりの会」発足の準備段階。（建設省河川局通達の近自然河川工法等の勉強会で生き物にやさしい川づくり等を学ぶ）工事の進展を期待しながら見守る。
1月下旬	工事現場に大きな岩（ふたかかえ程）が大量に運び込まれ、川が半ば埋められた状態となる。現場に掲げられた看板の完成予想図のやさしい雰囲気とはかなり違うのではないかと話し合う。
2月初旬	野川で遊ぶまちづくりの会（仮称）として近隣の住民（PTA・自治会・幼稚園等）に呼びかけ、東京都（南部事務所）及び市（公園環境課）へ説明解開催請求。
2月中旬	都（南部事務所）へ説明会でなされた要望事項を8項目にまとめて送付し2月末までの回答をお願いする。
2月下旬	都より電話で文書での回答はできないができるだけ要望書の趣旨は尊重すると話しあり。
4月9日	工事の全貌がかなりはっきりしてきた。地元の自治会から説明会の内容にについて話をして欲しいとの要望あり。説明会の呼び掛け人としての責任上出席すると返事をする。
4月12日	地元自治会の方23名参加。工事の内容及び要望した事項などについて説明を行う。そして要望事項についてもう少しはっきりした回答をもらうように少し住民に範囲を広げて呼び掛けを行うことを決定。
5月9日	「いこいの水辺広場を考える会」開催（参加20名、地元住民、PTA1、幼稚園1、他地域の住民の方等）主なる意見は大雨の場合の増水の危険性の問題や公園化することによるゴミや放置自転車、暴走行為等の不安、自然を破壊する危険の問題（生き物や植物等）がだされた。尚、自然に対する考え方では参加者の間でも意見が分かれる場面もあった。（例、川の中は立ち入り禁止にすべき等）
5月中旬	「いこいの水辺広場を考える会」の決定により再度説明会の開催を要望し、都は直ちに承諾するも、市では、東京都管理委託契約を未だ結んでいない状態なので出席できないとの回答があり地元自治会からの申し入れも功を奏せず、野川の問題に数年前から熱心に取り組んでおられる、野川流域自治会懇談会の小畑会長や副会長の津村さん、春日さんにお会いして援護をお願いしたりする場面もあった。
5月24日	新市議会議員になられた杉山典子さん及び生活者ネットワークの江刺事務局長の尽力により市の方達も参加して下さることになった。
5月30日	第2回説明会開催。地元自治会等26名参加。都南部事務所、工事課長他3名、調布市下水道課長、公園環境係長等3名。 市民に関係深い工事に関しては事前に説明会を開く等、市民に周知徹底させる方策を取って欲しい。市の窓口を作ることはできないか等の質問が出された。市の広報に掲載されることになった。 行政と市民が率直に意見を交換し合える関係を作るには市民も行政もあまりに不慣れであり、その第1歩となるにも遥かに遠い道のりを思わせる経過であった。

以上の経過について私達の見解

私達の「野川で遊ぶまちづくりの会」は、都市の貴重な自然である野川で、子供や大人が自然（生き物も含めて）と触れ合うことができることは素晴らしいことだと思うのですが、行政がこのような工事を行う場合に市民が何を望んでいるかを事前に聞くことを、そしていささかでも危険があれば周知徹底させる方策を取って欲しい。そのようなことを通じて、市民と行政が一体となってよりよいまちづくりを模索することができればよいと考えます。（文責　依田　輝男）